HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	１．北海道大学所蔵・道北地方の考古資料について
Author(s)	澤井, 玄; 中沢, 祐一; 矢原, 史希
Relation	北海道大学所蔵道北地方収集考古資料 = An Illustrated Catalogue of the Prehistoric Artifacts from northern Hokkaido, Japan / 澤井玄,中沢祐一編集 ; 澤井玄,中沢祐一,矢原史希執筆
Issue Date	2019-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77746
Type	book part
File Information	04Artifacts northern Hokkaido_1-5.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

１．北海道大学所蔵・道北地方の考古資料について

（１）収集年代・収集地

今回報告する北海道大学医学部所蔵の道北地方各地の考古資料は、北海道大学医学部の児玉作左衛門博士および大場利夫博士らによって収集された遺物である。この資料は、これまでのところ何れの形でも公表されたことが確認できない未発表資料と考えられる。また、遺物に伴うバックデータが失われているため、周辺情報からの推定となる。

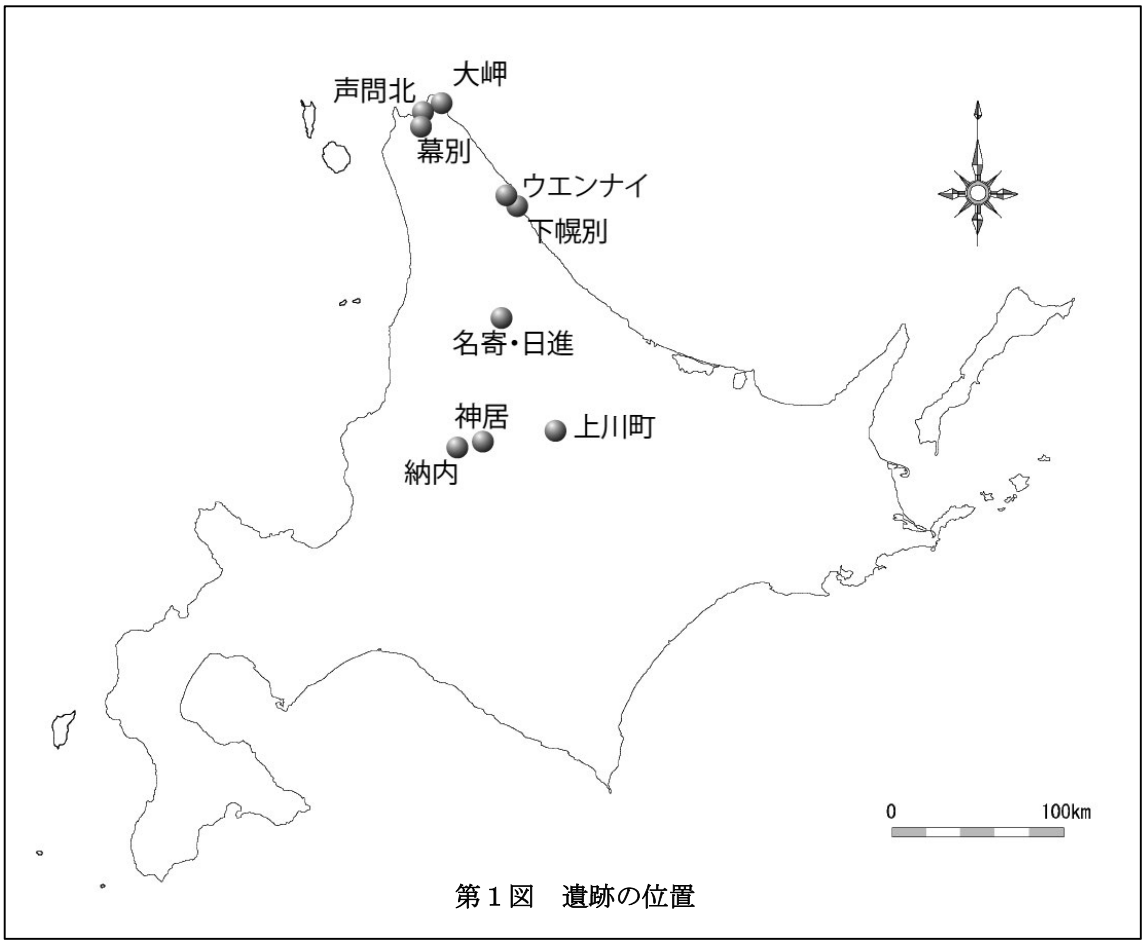
①　収集年代

収集年代は大半が不明であるが、一部の資料に「6.5.3」「6.5.9」といった注記ラベルが貼付されている（『神居村竪穴』土器資料）。昭和６(1931)年５月３日または同年同月９日の収集資料とも考えられる。また「名寄」資料中に「名寄　昭和二十三年(1948 年)　稲葉より購入」のラベル(PLATE18)が添えられている。この他、昭和 42（1967）年 4 月 5 日付朝日新聞の紙片が枝幸町収集資料に含まれる。児玉博士は昭和 34(1959)年に定年退官し、また大場博士は昭和 41(1966)年に文学部に新設された北方文化研究施設に異動している。そのため、この医学部所蔵資料は遅くとも昭和 41 年以前に収集されたものと考えられ、この新聞紙片は改梱されるなど何らかの理由で、後から資料中に入ったものと推定される。

②　収集地

収集地は、「神居村竪穴」（PLATE1～2）は旭川市神居古潭周辺、「納内」（PLATE3）は深川市納内周辺と考えられる。両者は行政界によって区切られているが、いずれも石狩川右岸に連続的に所在する大規模な遺跡群に位置している。「名寄」（PLATE4～7）・「日進」（PLATE8～10）は現在の名寄市と思われる。このうち日進については天塩川の支流である名寄川左岸から天塩川に合流する一帯に多くの遺跡が広がっており（日進１遺跡～日進２０遺跡）、そのいずれかの資料である可能性がある。「上川」（PLATE11～13）は今回報告する一連の資料の地域性から行政区分上の上川郡のいずれかと思われるが詳細は不明である。他の資料がほぼ旭川市以北であることから、この「上川」資料も旭川市以北の可能性が高い（第１図においては現在の上川町を示した）。「幕

別」・「声問北」（いずれも PLATE14）・「大岬」（PLATE15）は稚内市と思われる。幕別は現地名としては存在しないが、現在の稚内市声問村恵北に、かつて幕別町が存在（1963 年に恵北と改称）し、旧国鉄北見線の幕別駅もあったことからこの周辺と考えられる。既知の遺跡として周囲には恵北１・恵北２・恵北３遺跡が所在する。「声問北」は出土土器（続縄文土器）から現在の声問川大曲遺跡である可能性がある。「大岬」は稚内市宗谷岬東側の大岬１・大岬２遺跡周辺が考えられる。「下幌別」（PLATE16）・「ウエンナイ」（PLATE17）は遺物の注記および貼付ラベルよりそれぞれ枝幸町内を流れる幌別川河口付近・枝幸町宇遠内と思われる。この他、出土地不明の土器資料が１点ある。



第１図　遺跡の位置

（２）土器資料の内容

本資料のうち土器について概要を記す。

①　神居村竪穴（PLATE1･2）

神居村竪穴（1201-1-1-99-99-1～5）資料はいずれも擦文土器である。1 はハケメ調整の上に多条の横走沈線が斜位･縦位に施文され､複段の文様帯を形成する｡内面は黒色処理されている。擦文文化後期の土器である。2、3 は無文であるがハケメ調整・胎土・焼成・内黒処理などから擦文土器と考えられる。4 はハケメ調整の上に横位の平行沈線文を施し、その後、縦位に近い斜位の沈線で山型文を形成する。擦文中期の土器である。5 は擦文土器の底部である。胴部下端はハケメ調整。底部はササと推定される圧痕がある。

②　納内竪穴（PLATE3）

納内竪穴(1202-1-1-99-99-6～10)資料はいずれも擦文土器と推定される｡6 は無文の口縁部。内面は横ミガキ、外面は縦ハケメの後に横ミガキが施されている。7 も口縁部。口唇直下に横方向の凹帯を２条施し､間の凸帯上に刺突～短刻文を連続して施す｡下位は斜格子文が施文される。擦文文化後期。８は胴部。縦横のハケメ調整の後、２条の平行沈線で大きな連続山型文を描き、その下端を同じく平行沈線文で無文部分と区画する。擦文後期。９は口唇部を欠く口縁部。内面は横ミガキ。口唇直下に１条の沈線を巡らせ、その下位に粗雑な連続山型文を描く。擦文後期。10 は胴部。内面は横方向のミガキ、外面は縦方向のハケメ調整を施した後、やや粗雑な多条の横走平行沈線文を施す。外面に 1 箇所ボタン状貼付けがある。擦文前～中期か。

③　名寄（PLATE4）

名寄（1203-1-99-99-4-11～26）の資料について記載する。11 は口縁部。口唇部は指頭？で押圧し小波状を呈する。口縁部は肥厚する。口唇直下に３条の平行沈線を巡らせる。地文はＬＲの縄文。口唇直下に穿孔あり。縄文晩期（タンネトウＬ式)。12 は口縁部。菱形と長方形の押型文を沈線で区画して複段に施文。口唇上面にも菱形の押型を施文する押型文土器。口縁部肥厚帯直下に径７㎜の穿孔あり。縄文前期後半。13 は胴部。縞縄文をほぼ縦位に施文する。続縄文土器

か。14 は胴部。縄文原体は RL。中期前半の円筒土器か。15 も胴部。径５㎜程度の竹管状の施文具で全面に規則性無く刺突文が施される。縄文前期後半か。16 胴部。風化が著しいが縄文原体は RL？の斜行縄文が施される。縄文中期末葉の北筒Ⅱ式（トコロ 6 類）か。17 は無文もしくは風化が著しく文様を認識できなかったが、胎土･焼成から縄文土器と思われる。18 は胴部に LR の縄文が付される。北筒Ⅱ式（トコロ 6 類）か。19 は胴部破片。撚り糸文を施した後、方向を変えて同じ原体で施文する。縄文早期（東釧路Ⅳ式）か。20 は内外面ともに縄文を付す。器壁が厚く大型の土器と推定される。縄文前期か。21 は縦３列×横４列を単位とするかと思われる刺突文が付される。縄文前期か。22 も刺突文が付される。前期か。23 は底部である。やや上げ底の底面に縄文が付される。縄文晩期か。24 は擦文土器の胴部上半。沈線による斜格子文を付し、上下を 2～3 条の横走沈線文で区画する。擦文後期。25 は無文の胴部。外面に縦ミガキが認められる。擦文文化後半か。26 も無文の胴部。外面に縦ハケメが認められる。擦文土器。

④　日進（PLATE8）

日進（1203-2-99-99-99-33～42）の資料について記載する。33 は口縁部の破片である。2 本を 1 単位とした沈線が横走、湾曲、垂下するなどして描かれる。主として北海道南西部に分布する縄文後期の入江式土器の可能性がある。34 は口縁部破片。無文でナデ調整が施される。縄文土器か。35 は口縁部。口唇部上面に刻み目を施し、無文帯の下に縄文を付す。縄文晩期（タンネトウ L 式）。36～39・41 は胴部破片。縄文は RL。内面はナデ調整。胎土は緻密。縄文晩期前半か。40 は無文。ナデ調整。縄文後期以降か。42 は LR の縄文。縄文前期から中期頃か。

⑤　幕別・声問北（PLATE14）

1404-1-1-1-99-52 は口縁から胴部にかけての破片である。頚部がやや縮約し、肩が緩やかに張り出す甕型土器である。口唇付近に水平に近い斜行刻文、口唇直下に円形刺突文が付され、肩部に円形刺突文と沈線を交互に組み合わせた文様帯が横走する。文様はオホーツク土器の十和田式に一致するが、器形が後続する刻文式に類似してくることから十和田式の後半段階に位置づけられる。1404-1-1-1-99-53 は無文の破片である。胎土･焼成などからオホーツク土器と推定

される。(参考：天野哲也・中沢祐一「オホーツク文化前期の集団関係－「幕別Ａ地点」の土器から－」『実証の考古学－松藤和人先生退職記念論文集－』(同志社大学考古学シリーズＸⅡ)2018)。1404-2-99-99-99-54 はやや大きめの胴部破片。口縁部近くに突瘤文が確認できる。器面に LR の地紋。縦位に平行する 2 条、またその下端から直角に擬縄貼付文を配す。続縄文土器の宇津内Ⅱａ式。

⑥　下幌別（PLATE16）

下幌別（1406-1-99-99-99-59～61）の資料はいずれも擦文土器である。59 は無文の胴部破片。胎土・焼成などから擦文土器と思われる。60 は高杯の脚部。外面はハケメ調整、内面を黒色処理。高台の底面 3 カ所に幅 3㎜・深さ 7～8㎜ 程度の切り込みを付す底面刻印を有する。擦文文化後期。61 は杯？の破片。ハケメ調整の後に、沈線による綾杉文が施され、その下端を斜行短刻線文によって文様帯が区画される。擦文後期。

⑦　ウエンナイ・不明（PLATE17）

1406-2-99-99-99-62 は胴部破片。地紋は RL の縄文。2 条の平行する擬縄貼付文がダイヤ型？・また横方向に付される。外径 14㎜ 内径 6㎜ の穿孔がある。続縄文文化の宇津内（Ⅱｂ？）式。1406-2-99-99-99-63 は口縁～胴部上半。口唇部に刻み目、口縁直下に水平方向 3 列の貼付文を施しその上に列点を付す。貼付文の下から縦位に帯縄文を付す。径７㎜ の穿孔が施される。続縄文文化の後北 C2-D 式。

9999-99-99-99-99-64 は胴部破片。内面は黒色処理され、外面はハケメ調整。胎土・焼成などから擦文土器の高杯の可能性がある。

２．遺物 ID について

個別の遺物には、資料登録のための ID をつけている。遺物 ID は６種類の項目からなる。それぞれの項目ごとにコード化し、組み合わせている。第１表に、ID を構成する６種類の情報の詳細を示す。第２表に道北地方収集遺物の ID 情報の詳細を示す。